

小澤実・薩摩秀登・林邦夫著

『辺境のダイナミズム』

松本 涼
藤井 真生
村上 司樹

はじめに

近年、日本における西洋中世史研究の進展はめざましい。しかも歴史学のみならず、文学、美術、哲学、音楽など、関連諸学が連携して、知の総合と枠組み刷新の方向に向かっていく。二〇〇九年に発足した西洋中世学会^①、および広範な読者を対象とした叢書「ヨーロッパの中世」(岩波書店・全八巻)は、こうした活況の象徴といつてよい。本書は、意欲的なタイトルがならぶ同シリーズ第三巻にあたる。

ヨーロッパ世界の「中心」が、英独仏およびイタリアなど、いわゆる西欧と理解されてきたことは贅言を要すまい。本シリーズ執筆陣もまた、スペイン史家・関哲行氏(第四巻「旅する人びと」)をのぞき、いずれも西欧諸地域の専門家である。その意味では依然として西欧中心的な学界に対し、本書は、北欧・東欧・

南欧という「辺境」の視座から、ヨーロッパ史像再考を迫る試みと位置づけられよう。

「ヨーロッパ」が所与の概念でなく、それ自体、歴史の産物であることはいままでもない。ロバート・バートレットによれば、ヨーロッパを生み出したのは中世の拡大と均質化であり、かかる形成運動の最前線こそが「辺境 Frontier」なのだ^②。つまり「辺境」は「ヨーロッパ中世という固有の世界」理解に不可欠のテーマなのであつて、そうであればこそ本書も、近年の研究動向をふまえつつ総合的叙述をめざす。すでに名の知れた薩摩秀登、林邦夫の両氏がそれぞれ東欧史と南欧史を担当し、北欧史では気鋭の小澤実氏が健筆をふるっている。

第Ⅰ部「北洋のヨーロッパ」(第一―三章)、第Ⅱ部「東に開かれたヨーロッパ」(第四―六章)、第Ⅲ部「イスラームと向き合うヨーロッパ」(第七―九章)と、本論は北欧・東欧・南欧の順に展開される。前後に短い序章(薩摩秀登)と終章(林邦夫)を配するが、以下では独立して論じないため、ここで簡単にふれておきたい。序章「文明と出会うとき——ある司教の生涯」は、チェコ出身でドイツに学んだのちイタリアで認められ、ハンガリー布教後ポーランドで殉教した聖アタルベルトの生涯に、「辺境」とヨーロッパ文明の多様な出会いのあり方をみて導入とする。対して終章「辺境とヨーロッパ」は三地域の地理的關係にふれたのち、「辺境」と中心部および「辺境」とさらにその外部の、二つの座標軸に各地域を位置づける。そして最後に、「中心部から文化を受容するだけ」でなく「独自のすぐれた文化」をはぐくんだ「辺境」から、新たな中世ヨーロッパ史像構築の必要性を説いて結び

とするのである。

ところで書評とは、本来、単独個人による学問的営為であろう。しかし「オリジナリテイあふれる研究論文が次々と発表され」るなか、それぞれ明確な特徴をもつ北欧・東欧・南欧の三地域の、「研究の最先端」を示したのが本書である。仮にいずれか一地域の専門家であっても、残る二地域の膨大な研究蓄積をふまえ、正當に評価することはできない。そうした判断にもとづき、評者も同じく三人とした。以下、第Ⅰ部は松本、第Ⅱ部は藤井、第Ⅲ部は村上が文責を負う。全体評については、共通する論点を三者で議論し、加筆・修正して完成させた。最終的には村上が文体をまとめているが、本稿の内容は、あくまで評者三人の共通見解である旨をこわっておく。

第Ⅰ部 小澤実「北洋のヨーロッパ」

中世スカンディナヴィア世界とは何であったか。それが、第Ⅰ部「北洋のヨーロッパ」のライトモチーフである。筆者はまず、地中海中心の伝統的なヨーロッパ認識をあらためるべく、北海とバルト海をひとつづきの「北洋」とみる新たな地図を提示する。そのなかでスカンディナヴィアとその影響圏を中心にすえ、ラテン・カトリック文明と東方の二つの異文明（ギリシア・正教文明／アラブ・イスラーム文明）との結節点とすることで、ヨーロッパの「辺境」という理解の再考をめざす。

第一章「北洋の政治秩序」では、ローマ期からカルマル連合期までの政治的過程が語られる。ヴァイキング時代、スカンディナヴィア人はコンスタンティノープルからグリーンランドまで活動

領域を拡大し、各地で海外コミュニティを形成した。一方、本土においてはデンマーク・ノルウェー・スウェーデンの三王国が端緒をみる。三國は一一―二世紀にキリスト教を受容し、周辺領域を組み込みながら海上王国として成長をとり、やがて同君連合にいたる。その過程では、北海の覇者となったクヌートがローマでドイツ皇帝の戴冠式に列席したように、「辺境」であるはずのスカンディナヴィアがヨーロッパ政治秩序の「中核」に切り込む局面もあった。

第二章「北縁の社会空間」は社会構造の変化を対象とする。まずは信仰世界、とりわけキリスト教心性の受容について、スカンディナヴィアは改宗こそ遅れたものの、一一世紀以降に王国形成と連動してキリスト教の成熟が進み、一四世紀の聖ピルキッタの登場にいたり霊的「辺境」から「中核」へ進出したと位置づけられる。一方で、活動領域の拡大にともない、「農民」の世界であったスカンディナヴィアにも交易地が生まれ、中世盛期以降には宗教・政治・商業上の機能を集積した都市が成長する。その交易ネットワークは三文明の回路となるだけでなく、「辺境」のなかの「辺境」に暮らす北欧独特のマイノリティ、すなわちサーミ・フィン人・グリーンランドのイヌイットにまでおよんでいた。

第三章「スカンディナヴィアのアイデンティティ」では、ラテン・カトリック文化の受容を基本路線としつつも、独特の文化圏を築いた中世北欧文化が紹介される。その代表格といえるのがルーン文字である。ヴァイキング時代にさかんに建立されたルーン石碑は、多彩な背景装飾をともなう総合芸術であると同時に、建立者の威信や相続権の所在を顕示する政治的メディアともなっ

た。中世盛期以降についても、ラテン・アルファベットとの「二重文字社会」の可能性が指摘される(第二章)。やがて中世後期になると、ヨーロッパへの同調だけでなく反発もあらわれ、ルター派国家への転換のなか、自らの起源をゴート人に求める「ゴート・ルネサンス」という新たなアイデンティティが表出する。

第I部でまず注目すべきは、三国の動向を共時的にとらえ、また外部への開放性に常に配慮している点である。これによって、内外を問わない活発な交流のアーリーナとしての中世スカンディナヴィア世界が生き生きと描き出されている。従来の北欧中世史では、本国からして各国史の伝統が強く、とくに政治史について叙述の軸となるのは三王国各自の「国家形成」だった。ここでは、ヴァイキング時代をのぞき、一体としてのスカンディナヴィア世界が想定されること自体少なく、ドイツ皇帝やローマとの関係構築のような外部との相互関係に言及されることもまれだったのである。

くわえて、文化を社会的コンテクストのなかで理解するという一貫した視角にも注目したい。その最たるものが、第三章3節「アイスランドの記憶」である。評者は中世アイスランド史を専門とするが、北欧中世文化のなかでアイスランド文学(エッダとサガ)のもつ重要性は論を俟たない。しかし、本節はテクストの内容紹介にとどまらず、写本の生産と利用の現場にも光をあて、ときに制作依頼者の思惑にしたがい権力闘争の武器ともなった、社会のなかのサガのあり方までも描き出している。そのような視角は従来みすこざされてきた、テクスト成立の背後にあるオーラル

な情報伝達や中世後期の写本文化に目を向ける、サガ研究の最新の動向に即したものである。ただし、一四世紀における海外文学の翻訳の流行と、ノルウェー王権受容という政治的变化とを結びつける見解(一〇一頁)には留保が必要であろう。海外文学への関心の移行は、たしかに王権受容によるアイスランドの独自性減退の証左とみなされてきたが、中世後期への関心が高まる現在、それを王国の臣民となった当地の「ヨーロッパ」を意識した新たなアイデンティティ模索の一環と評価する向きもあるからである。特定の文化現象を、社会を読み解く鍵として活用するためには、個々の事例についてより慎重な検討が求められるのではないだろうか。

また、第I部は一貫してラテン・カトリック世界における「辺境」という位置づけを否定的なレッテルにとらえ、視点を三文明圏に拡大することでその相対化を図っている。その手法は、文明圏を容易に越境するヒト・モノ・情報の多様な移動のありようを可視化し、書名「辺境のダイナミズム」にあふわしい世界像の提示に寄与した。その一方で、仮に読者が筆者とこの視角を共有せず、あくまでラテン・カトリック世界内部でこの叙述を眺めた場合、北欧はやはり「辺境」にすぎないという印象も導くように思われた。だが、たとえば、「中心」文化を受容しながらも決して同化しない独特の文化醸成など、中世スカンディナヴィア史には、「中心」と距離をおく「辺境」という政治的・地理的条件を積極的に利用した側面もある。レッテル克服という第I部叙述の強い論調は、そうした、「辺境」の肯定的評価の可能性をおおいかくす危険性ははらんでいる。

とはいえ、強い比較史への意識に導かれた本書のスカンディナヴィア世界像が、北欧史の閉鎖性を打破し、分野をこえた対話を促すことはまちがいない。なによりも、今後この魅力的な空間と向き合う者に、新たな指針が示された意義は大きいだろう。

(松本涼)

第Ⅱ部 薩摩秀登「東に開かれたヨーロッパ」

第二部で論じられる東欧は、現在二〇あまりの国が存立する地域である。近代国家の数がそのまま中世世界の多様さをあらわすわけではないが、しかしカトリック圏と東方正教圏を内包するなど、本書でもっとも執筆の困難なパートではなかったかと思われる。

第四章「二つの帝国のはざま」は東欧の政治史を整理する。しかし、そもそも中世の「東欧」とは何であろうか。筆者はこれを、東のビザンツと西のローマ・フランクという二つの皇帝権にはさまれた、「中間領域」として明快に定義する。古代末期から移動が活発化するスラヴ人と遊牧民は、対立と連携をくり返す二つの帝国から多大な影響を受けつつ国家形成を果たした。これら国家群の興亡はまさに「大文明の「中間領域」で生じたのであった。ところが、オスマンの台頭により東の文明ビザンツが滅亡すると、この「中間領域」は「ヨーロッパの東の周縁」へと性格を変えてゆく。中世後期にはこの東の周縁に王朝連合が成立し、西欧世界よりも安定した国家体制を築くことになる。周縁ゆえの余力が一因として指摘される。

つづく第五章「中間領域」の社会とその変貌」は、「中間領

域」が東西の文明の強い影響を受けつつ、どのような社会変化を経験したのかを問う。東欧社会を構成する人間集団はスラヴ系住民だけではない。東方の遊牧世界からの到来者や都市のユダヤ人、そして中世盛期以降には、都市と農村の母親を大きく変化させたドイツ人の植民者たちを忘れることはできない。筆者が注目するのは、世俗貴族が植民運動を利用して所領開発に成功した事実である。その結果、貴族たちは政治的躍進をとげ、君主権力に掣肘を加えうる勢力へと成長する。その帰結として以後の東欧には君主と貴族の二元的権力構造が出現し、前章の如き安定した国家体制が創出されたのである。

政治、社会の変化を受け、第六章「はるかな「ローマ」への視線」では文化が主題となる。東西の皇帝権のはざまは、同時に二つの教会のはざまでもあった。「中間領域」であった現地社会は、双方からの働きかけに対して戦略的にキリスト教を受容していった。以後の東欧社会は、前二章で述べた安定した国家体制のもとに、むしろヨーロッパの政治的・文化的活動の最前線ともなる。とりわけ一四世紀のプラハと一五世紀のブダは知識人をひきつける宮廷となった。人文主義の精神は確実に東欧社会に根づいてゆき、そしてその精神は、ビザンツの滅亡という政治的事件とともに、この地域の人々に「ヨーロッパの東部」としての自覚を強力に促したのであった。

さて、最初に述べたように、この第二部の肝は東欧のとらえ方すなわち「中間領域」という筆者独自の定義にある。ゲルマン・ラテンのカトリック圏に対するスラヴの正教圏として西欧から区別されてきた「東欧」が、もっぱら共産主義国家群を示す用語と

なつたのは第二次世界大戦後のことであつた。この時期に書かれた「東欧史」は、なによりも二〇世紀の政治的な枠組みに依拠するものである。その後、ベルリンの壁崩壊とともに「東欧」の各国はナショナル・ヒストリーの再構築へと向かい、同時に「中欧」「東中欧」といった概念が、とくにカトリック圏の研究者の間で用いられるようになった。こうした動向に対応して、我が国でも「東欧史」は四分割され、よりまとまりのある歴史叙述がもたらされた。だが、これとて近世以降の政治体制に規定された区分である。たとえば、「ドナウ・ヨーロッパ」とは、ハプスブルク帝国の支配を受けた地域に他ならない。しかし、中世ポーランドとチェコの強い近似性を知る者にとつて、両者を分離した形での歴史叙述にはかなりの違和感が残る。これに対して筆者は、あくまで中世の事情に立脚し、「二大文明には含まれた」「中間領域」として東欧を位置づけることにより、「中世東欧」史の可能性を示してみせたのである。

読者はページをめくるにつれ、カトリック圏に属するハンガリー王がビザンツ皇帝としばしば姻戚関係を結ぶなど、密接な政治的關係をもつていたこと（第四章）、ドイツ人がバルト海沿岸からポーランド、チェコ、ハンガリー（ルーマニア）まで、東欧を縦断する形で植民活動を展開し、各地に共通する都市文化をもたらししたこと（第五章）、正教圏でもカトリック圏でも、（決して同根であるとはいわないが）正統教会に対する民衆的異端的宗教熱が噴出したこと（第六章）に気づく。これは「東欧」を「中間領域」と理解する枠組みを維持したからこそ見えてくる図柄であり、地域を細かく分断した記述ではすべて視界から抜け落ちてし

まったことだろう。

ただし、気になる点もある。第四章では均等に各国家の成立と展開を説明しているが、ここは思いきつて「中間領域の新たな盟主」（一三七頁）たるハンガリーを叙述の中心にすえたほうが、「中世東欧」を「中間領域」ととらえる設定の有効性をより説得的に示すことができたのではないだろうか——筆者がハンガリー史家でないことは承知しているが、また、本書ではあらかじめヨーロッパをカトリック圏に限定している（二頁）ことにも問題がある。実際、第五、六章では正教圏のバルカンに対する記述が明らかに薄い。はたしてカトリック圏に重点をおいた東欧史叙述が「西欧中心史観」の見直し（三一八頁）にとつてどのような意味をもつのか、こうした構成からは明確な解答を読み取ることは難しい。これと関連して、オスマン支配を受けるようになったバルカンのアイデンティティはどのようなものになったのか——「非ヨーロッパ」と自己認識するようになったのか——という点も、もう少し説明がほしかった。

だが、我が国の中世東欧史研究の蓄積と、なにより本書で筆者に与えられた紙幅の量を思えばそれは望外の嘆であろう。後に続く研究者が引き継ぐべき課題として受けとめたい。

（藤井真生）

第三部 林邦夫「イスラームと向き合うヨーロッパ」

第三部はイベリア半島とシチリア島に限定した南欧史である。「ヨーロッパの中世」という視点に立てば、それはキリスト教勢力がイスラーム領の征服と社会的統合を進め、また同時に異教徒

文化を受容する過程であった。三章いずれも、まずイペリアに紙幅を割き、比較対象としてシチリアに言及する。筆者の専門がスペイン史という事情もあろうが、いわゆるレコンキスタがおよそ八〇〇年を要したのに対し、シチリアのノルマン征服からムスリム住民の実質的消滅までは二〇〇年にも満たない。その差を反映した構成ともいえる。

第七章「せめぎ合いの辺境」は政治史である。ともすれば十字軍と同一視されがちなレコンキスタは、現実には信仰の壁をこえた合従連衡がくり返される、複雑多様な関係史であった。半島キリスト教世界とは独立国家の集合体でしかなく、同イスラーム世界の分裂はさらにそれを上回る。ときに宗教戦争の色彩を帯びようとも、それはローマ教皇やムラービト朝など、異教徒を敵視してやまぬ外部勢力が干渉したためにすぎない。むしろ「せめぎ合い」は、信仰を同じくする勢力のあいだでこそ、熾烈であったとさえいえる。さらにシチリアでは、征服の主体・契機・期間の短さゆえ、そもそも信仰が大義名分になる必要さえ生じなかった。利害最優先の現実的行動こそ、両地域に共通の、中世政治史をつらぬく特徴なのである。

第八章「共存という社会的実験」は社会史である。比較的寛容だった当初の降服協定がしだいに空文化し、最終的に全ムスリム住民の追放という結果をみたことは、イペリア史を学ぶ者なら誰もが知ってであろう。しかし経済的には有用でも政治的には不安材料であるムスリム住民を抱え、いかにしてキリスト教徒主体の社会に統合するのか、模索した過程もまた一一世紀以降の中世史そのものであることを忘れてはならない。シチリアでも、都市・農

村におけるムスリム住民の境遇こそイペリアとさほど変わらないものの、宮廷においては国政に参与するムスリム廷臣すらみられた。しかしけつきよく普遍的価値（基本的人権など）に欠ける中世と、ムスリム処遇の規定を欠いたキリスト教の、二重の境界が「共存という社会的実験」を崩壊させたという。

第九章「撰取される知と文芸」は文化史である。西欧諸言語に多数のアラビア語が流入していることから明らかなように、中世ヨーロッパにとつてのイスラームとは、多くを学ぶべき先進文明でもあった。南の「辺境」と位置づけられるイペリア・シチリアが、ここでは一転して、ヨーロッパ「中心部」に多大な文化的影響をおよぼす窓口となる。まずイペリアでトレード学派、つづいてアルフォンソ一〇世のカステイリヤ王権がメセナとして、翻訳による学知の撰取を推し進めた。シチリアでも、グリエルモ一世やフリードリヒ二世など、翻訳活動を主導したのは王権である。なお文芸については、聖職者の著作ながらイスラームの影響がみられる「よき愛の舟」（一四世紀）を例に、信仰と芸術が分離した中世スペインの心性が明らかにされる。

以上、内容を概観した。さて第一に評価すべきは、キリスト教世界限定のイペリア・シチリア比較史という、従来なかつた叙述の枠組みである。評者の専門も中世スペイン史だが、ともすればその特徴すべてが、「イスラームと向き合う」ことで説明されがちな印象を受けることが少なくない。むしろ「再征服・再植民」を理由に、封建制と商人・手工業者中心の都市不在を強調した、かつての後進地スペイン論などは問題外である。しかし逆に、多宗教・多文化のモザイク状態を強調しすぎて、それはまた別の

「辺境」特殊論に帰着しかねない。ヨーロッパ・ラテン・カトリック世界という認識の、妥当性はそれとして議論すべきだとしても、両地域がその一員であったという面を正當に評価しなければならぬのである。それゆえイベリア・シチリアの比較史を通して、単に征服・統合を推進した強大な権力というより、文化的な結節点として「共存」の鍵をにぎっていたという王権像は注目される。国王をとりまく文化的な環境や先行キリスト教国家の宮廷伝統が、翻訳活動の内容ばかりか残留ムスリムの境遇をも左右したという指摘は、今後の研究の方向性を示すものといえよう。

とはいえ、疑問なしとはしない。つまるところ利害優先で信仰すら方便であったというのだが、両地域におけるキリスト教信仰の内容、および教会のあり方は明らかにされているだろうか。実際、終章でスペインの聖ドミニクスにわずかな言及があることをのぞけば、両地域のキリスト教そのものが語られることはない。しかも同じ筆者による「終章」は、カトリック世界の支えであると同時に不安定要因でもあるとして、辺境教会に独自の重要性を認めているのである。こうしてみると第三部で教会史にふれたいないのは不自然であり、そもそも政治と宗教を泰然と区別するかのような論調自体、全体としていささか偏った理解であるとの印象をあたえかねない。制度史や社会経済史の成果をふまえてイデオロギー体系や儀礼実践を分析する、いわゆる政治文化史がひとつの有効な手法となりつつある現在、政治・社会・文化を包摂した広義の教会史が求められているのではないか。前述した王権の位置づけは、この意味で貴重な指針といえる。それだけに聖職思想を外因説に帰し、近世につながる宗教的純化の動きを中世およ

びキリスト教の限界とみなすなど、ステレオタイプな説明がみられるのは気にかかった。

これ以外にも、たとえば、ユダヤ人の記述があまりに少ないとの批判もあるだろう。しかし限られた紙幅のなか、キリスト教南欧の比較史を提示した意義は大きい。評者をふくめ西洋史学の立場から同地域を研究する者は、まずこうした視座をこそ、貴重な知的財産として共有すべきである。

(村上司樹)

全体に対して

わが国の学界に本書がなしたる貢献は、西欧に偏重した従来のヨーロッパ史叙述に、「辺境」地域から異議申し立てしたことにある。この「辺境」をあえて単純化するなら、それぞれゲルマン的異教(北欧)・スラヴ(東欧)・イスラーム(南欧)の存在を理由に、ラテン・カトリック世界の「中心」すなわち西欧との異質性を強調されてきた地域といえよう。これに対して、ラテン・カトリック世界の一員という面に光をあてて「辺境」地域をとらえなおしただけではなく、中世ヨーロッパ全体の歴史像転換を図った意義は大きい。

しかし同時に、それがラテン・カトリック世界とヨーロッパそのものを同一視させ、結果としてビザンツなどの正教世界を別の文明と位置づけるにいたらしめたことは否めない。ラテン・カトリックとギリシア・正教、東西二つのキリスト教文明が同質だといえるのではない。だがビザンツをヨーロッパから排除するのは、「西欧中心史観を見直」(二二一頁)すべく問題提起した、本書

の趣旨に矛盾することではないか。東欧は両キリスト教圏の「中間地帯」と位置づけられるだけに、すでに第Ⅱ部評でもこの問題に言及したが、同じことは大なり小なり第Ⅰ部・第Ⅲ部にもあてはまる。もう少し説明が欲しいと感じるのは、評者三人に限るまい。もともと「非ヨーロッパ」とされたヒザンツ史家と西欧史家のあいだで、これを契機に新たな対話的研究が生まれるなら、それは本書の大きな功績である。

また本書はⅠ・Ⅱ・Ⅲ部とも、政治史・社会史・文化史という統一的な三章構成のもと、三地域それぞれの特徴を明確に打ち出している。各国史でなく、「辺境」史の総合的叙述を試みた点では、わが国の西洋史学に新たな可能性をひらいたといえよう。しかし「辺境」をキーワードに一書を上梓しながら、議論の共有が序章・終章に限られ、本論中にみられなかったことは惜しまれる。

たとえば北欧と東欧は、いずれもキリスト教改宗期にナシヨナルな守護聖人を輩出した。たしかに第Ⅰ部(三四頁)・第Ⅱ部(一五四―一五六頁)とも、そうした聖人は、「中世国家」の存在を保証する役割を担ったと説く。だがそれぞれの地域的な政治・社会状況にとどまらず、「中心/辺境」のヨーロッパ形成論にまで視点を広げれば、相互の議論を関連づけることも可能だったのではないか。すなわち評者の理解する限り、中世ヨーロッパの形成とは、キリスト教が社会に浸透していくプロセスでもある。しかしヨーロッパ各地で受容されたキリスト教は、決して均質なものでなく、現地の事情に則して読み換えられたものだった。またキリスト教を理解・受容する主体も個人ではなく、地域や身分など、なんらかの集団である。そこからすれば聖人とは、

いわばこうした教化の単位を、象徴する存在ともみなしうる。「辺境」たる北欧・東欧ではキリスト教化が遅れた。そのためこの集団の規模もつとも大きく——ここでは民族といえようか——、ゆえに改宗の過程もつとも明瞭である。これを検討するのは、キリスト教化すなわちヨーロッパの形成過程を、「辺境」からとらえなおすことではないだろうか。

また、北欧と南欧では、ただちに海のネットワークが想起される。もつとも北洋世界という枠組み、共同体を結びつける海の役割を強調した第Ⅰ部に対し、第Ⅲ部で地中海に光があたることはない。筆者の専門が内陸カステイリヤ史という事情もあろうが、八一―一世紀ヴァイキングに比肩する事象として、アラゴン王国の地中海進出をとりあげるのみである(終章・三〇九―一頁)。しかしこれと比較するなら、同じ北欧でもスカンディナヴィア三國の、海上王国の方が適切ではなかったか。いずれも一三世紀に王権が主導し、封建諸侯から成る十字軍の体裁をとりつつも、同時に交易ルートと商業利益の掌握をめざした。結果、周辺諸勢力の多様なリアクションを惹起し、後期中世ヨーロッパに「国際紛争」「国際政治」を現出せしめた点もよく似ている。ヨーロッパは、三方を「海に囲まれた小さな半島」であるという^④。その北と南で並行して、海を媒介に「中心」と「辺境」が交錯し、新たな政治システムを生み出したことは興味深い。同一の君主を戴きつつ、地方ごとに異なる法慣習・行政制度を維持したカルマル連合のあり方は、同時代のアラゴン連合王国(さらには近世スペイン帝国)にも通じる。他方でバルセロナ商人の活動が地中海王国を支えたといわれるのに対し、北洋の海上王国が国王・顧問団の

人的ネットワークに依拠していた事実など、それぞれの特徴の明確化につながる論点も少なくない。

たとえば以上のような共同作業を経ることにより、三つの「辺境」それぞれが「中心」を照射する「地域史」の並列を超えて、より一体的な「辺境史」に昇華させることも可能だったのではないか。

さらにいうなら、こうして描かれる「辺境」の多様性は、とりもなおさず「辺境」観の多様性をも明るみに出す。第Ⅰ部群のくり返しとなるが、おそらく第Ⅰ部ではレットルとしての「辺境」、第Ⅱ部・第Ⅲ部では地理的な意味での「辺境」が論じられている。現代の研究者間で「辺境」観が一様ではないのと同じく、同時代の中世においても、「辺境」概念は自明のものではない。ラテン・カトリック世界の「常職」にもとづいた北欧「辺境」観が、実は「中心」部のみならず北欧の知的エリートにも共有される一方、イベリアでは、三教徒支配を理由に「全スペインの皇帝」を称するなど、いわば当地を世界の中心とみなす理念さえ存在した。さらに東欧ポスニアの異端は東西の教会からみればマージナルなまさに辺境的存在にすぎなかったが、当該地域にとってはそのどちらにも属さない「独自の道」でもあった(一九一—一九三頁)。主体の立場で変化する、このような「中心/辺境」認識の流動性にまでふみ込んで議論すれば、西欧中心史観の相対化に具体的糸口が示されたかとも思われる。

おわりに

各部と全体について、評者らの要望を繰々述べてきた。執筆陣

にしてみれば、もとより承知のうえで記述した点も少なくなくろう。そもそも、シリーズの他書よりページ数の多い本書に、これ以上の分量増は望むべくもなかったかもしれない。ここで提起した問題はむしろ、類似したテーマに取り組む他の研究者たちの課題であろう。本書をきっかけとして、豊饒な中世ヨーロッパ世界へ読者を誘う書物の出版に、さらなるはずみがつくことを願うばかりである。

最後になったが、射程が広く意欲的な書物だけに、評者の知識や読みの浅さに由来する誤解もあったかと思われる。ひとえに執筆者一同の御海容を乞いたい。

① <http://www.medievalstudies.jp/index.php> 二〇〇九年末には学会誌「西洋中世研究」も創刊された。

② R・バートレット(伊藤番・磯山甚一訳)『ヨーロッパの形成』法政大学出版局、二〇〇三年。

③ R. Bartlett & A. Mackay, *Medieval Frontier Societies*, Clarendon Pr. 1996; N. Berend & D. Abulafia, *Medieval Frontiers*, Asgare Pub Ltd, 2002.

④ M・モラ・テュー・ジュルタン(深沢克己訳)『ヨーロッパと海』平凡社、一九九六年。

(A5刊) ix+三三七十一頁 岩波書店 二〇〇九年三月

二八〇〇円+税

(松本涼 京都大学大学院文学研究科博士後期課程)

(藤井真生 秀明大学講師)

(村上司樹 大阪市立大学・グローバルCOE研究員)